

開拓団の結末

塩坪 嘉雄（大正 14 年生まれ）

8月22日、快晴朝八時全員集合、10,000 有余の隊員が大広場に集まった。中隊長曰く、これから日本へ帰るため、ある所へ集結するとの事。背のうに米、タバコ、乾パンを入れるだけ入れ、毛布、外套、私物等を持って再び集合した。

ソ連軍の監視のもと直ちに出発した。我々皇国軍人も武装解除を受けた身、飛び足を取られたバツタの様なもの、なんと情けない憐れな姿であった。真夏の太陽は容赦なく照りつけた。どことなく一般邦人も加わり延々10 数キロメートルにもなった。腰の曲がったお婆さんから5、6歳の子供まで小さな荷物を背負い、裸足の子供もいた。気の毒なのは乳幼児をおぶった母親、中には死んだ児までおぶった母親もいた。若い女性たちは顔に墨を塗りボロの軍服を着ての逃避行、惨めそのものであった。

至る所に人馬の死骸、あるいは親とはぐれて泣いている子、その様相は地獄絵さながらである。

暑き日に親と別れし幼な子は 山の谷間に響く泣き声

その子供等は今日日本を訪れている残留孤児ではなかろうか。

今日も朝から真っ赤な太陽が昇り始めた。疲れが取れぬままの行軍が始まる。汗と埃にまみれた顔にはいよいよ疲弊の色が濃くなってきた。真夏の太陽が相変わらず照りつけている。

その時である、1組の老婆と幼児が集団より遅れやっと歩く姿に出会った。破れた靴、血が滲む素足が見えた。腹も空いているのであろう。あまりにも可哀想であった。そこで私が1袋の乾パンを与えた。その時の子供の喜び様は言葉に言い表すことが出来ません。老婆共々目に涙を浮かべ両手で捧ぐ姿は何とも言いようがありません。姿が見えなくなるまで手を振っておりました。

果たしてあの老婆と子供は内地へ辿り着くことが出来たのでしょうか、これが開拓団という美名のもと、渡満した邦人の結末であった。二度とこの禍を繰り返してはなりません。

捕虜雑感

昭和20年10月22日、騙され騙され遂にシベリアに連行された。山奥の収容所で夜8時過ぎであった。澄み切った夜空には我々の気持ちも知らないで綺麗な星が輝いていた。北極星が随分上の方であって相当北の方へ来たことが解った。その時の夕食は僅かなソバ粥であったが大変おいしかった。60年過ぎた今でもその味は忘れる事ができません。

終戦後2か月余り満足な食糧もなく特にこの7日間の汽車の旅は黒パン1個のみ、飲み水もままならぬ旅であった。体力が極度に衰弱し精神力で生きている様なもので、小さな丸太でも手で足を持ち上げなければ跨ぐことが出来ない状態であった。3年間電気と時計の無い本当の捕虜としての苦難の途が待っているのである。

飢えと寒さの為 60,000 足らずの兵士が故郷を夢みて凍土の糧になりました。空腹のため夢に見るのは殆ど食べ物ほとんの事ばかりでした。

隣の戦友と毎晩喰う話ばかり、ある日隣の友が一口で良いから銀めしを食いたいと言って眠りました。悲しいかな彼は翌朝には安らかに眠ってしまいました。

一口でよいから銀めし食いたいと 涙流して戦友は逝きたり

あまりのひもじさの余り凍った馬糞ばふんも薯(いも)に見えるのだ。また、蛇へび、蛙かえる、なかには鼠ねずみまで食べた者もいた。ロスキーが捨てた魚の骨まで食べ、あるいは腐った馬鈴薯ばれいしょを生で食べた。毒草で命を落としたものもいた。

風の便りによると、ある収容所では 1,000 人の同胞が飢えと寒さのため一冬に 700 人も亡くなりました。ロスキーの収容所幹部が我々の食糧を横流ししたそうである。また柵外さくがいの野草を取ろうとして射殺されたものもいた。捕虜の宿命、抗議することも出来ません。

顎こけて髭がぼうぼう目が窪み 頭朦朧 足がふらつき

氷点下 35 度での伐採ばっさいは体力のない我々には大変重労働であった。歩くのにもまならぬのに重い防寒被服、栄養失調の我々には身に応えるのであった。1 日 8 立方 米めーとるの作業ノルマは大変なものである。2 人 1 組で直径 50 センチ位の大木を 5、6 本位切らねばならない。

睫毛まつげには霜、髭ひげにはつらら、一生懸命働いても体力のない我々には到底ノルマは達成できません。ノルマ未達成だと夕食の黒パンが減食されるのである。隣の友が大きなパン、それを横目で見ながら小さいパンを食べるその気持ちは如何いかんばかりか。人間としてこれ程惨めな事がありました。牛馬より劣る扱いである。伐採は非常に危険な作業で今日も 1 人明日も 1 人と倒木の下になり沢山の友が亡くなりました。

昨日、今日、次から次へと戦友とまとが逝き 明日は我が身か眠れぬ夜を

六十年月日過ぎたる今も猶 生死彷徨うシベリア憎し

最後に凍土に眠る同胞どうぼうの冥福めいふくを祈ります。